



第6回 京都大学－慶應
義塾大学合同シンポジウム



美学の進化的基盤

日時: 2013年2月17日(日)午後1時～3時

場所: 京都大学こころの未来研究センター

京都大学稲盛財団記念館3階 大会議室

<http://kokoro.kyoto-u.ac.jp/jp/about/access.html#center>

テーマ: 美学の進化的基盤 **【公開シンポ: 入場自由】**

企画司会: 子安増生(京都大学大学院教育学研究科教授)

話題提供: 渡辺 茂(慶應義塾大学文学部教授)

話題提供: 齋藤亜矢(京都大学野生動物研究センター特定助教)

指定討論: 藤田和生(京都大学大学院文学研究科教授)

開催趣旨: 京都大学と慶應義塾大学は、グローバルCOEの5年間において毎年合同シンポジウムを開催してきたが、この連携は、2012年3月のプロジェクト終了後も、可能な限り、引き続き継続していく方針であり、今年度は京都大学で「美学の進化的基盤」というテーマで合同シンポジウムを開催するものである。渡辺茂先生は、『ピカソを見分けるハト』など、鳥類の絵画認識能力のご研究で著名である。齋藤亜矢先生は、東京藝術大学大学院美術研究科博士課程修了で「描画行動の発達と表象描画の起源－ヒトとチンパンジーの比較」など、霊長類の描画の研究を行う新進気鋭の研究者である。指定討論には、広く生物にご関心と造詣の深い藤田和生先生にお願いした。

お問合せ: 子安増生 HGB03675@nifty.com

渡邊 茂（慶應義塾大学）：美の進化的起源

私たちは美しい絵画を見たり、美しい音楽を聴くことを楽しみます。これは実験心理学的には感性強化といわれるものです。このような美的感覚は人間に固有のものではなく、他の動物にもあるようです。はじめに実験室で行われた動物の美的感覚の実験を紹介し、つぎにニワシドリの巣を中心にした野外での動物の美的感覚の研究を紹介します。そして最後に、このような美的感覚の進化的起源について、自然選択による説明、ダーウィンの性選択仮説、正直な信号仮説、感覚バイアス仮説、などの考え方を紹介し、ヒトの美的感覚と他の動物達の美的感覚との違いを考えてみたいと思います。

齋藤亜矢（京都大学）：「描く」の進化的基盤：ヒトとチンパンジーの「描く」

ヒトはなぜ描くことをはじめたのか。描くことの認知的な基盤を明らかにするために、進化の隣人であるチンパンジーの描画行動に着目してきた。チンパンジーは、筆記具の扱いに慣れると描くことができる。やみくもに筆を走らせるだけでなく、筆致に個性が現れるほどだ。しかしチンパンジーが具体的な物の形＝表象を描いた例はない。そこで刺激図形を用いた描画実験をおこない、なぐりがきから表象描画に移行する時期のヒトの幼児との違いを検証した。チンパンジーは、線をなぞるなど、描線をコントロールする能力は形を描き始めるころのヒトに劣らなかった。しかし、目などの部位が欠けた顔の線画に「ない」ものを補って表象を完成させることはなかった。今ここに「ない」ものを補う。「イメージ」をキーワードに、チンパンジー、ヒト幼児の描画行動、先史時代の洞窟壁画を参照しながら、描くことの進化的基盤について考察したい。